

社説

庄内町清川出身で明治維新の魁(さきがけ)といわれる幕末の志士、清河八郎は来年、没後150年を迎える。同町の清河八郎顕彰会などが去年の生誕180年から3カ年にわたり記念事業を展開。今年23日には、八郎が出奔したルートを活用したアドベンチャーラン大会が同町で開かれる。郷土の先人を見直し地域振興に役立てる契機としたい。

清河八郎は1830(天保元)年、清川村(現庄内町清川)の裕福な造り酒屋の長男として生まれた。満16歳の時に学者になろうと家出して江戸に上り、剣と学問の修業に励んだ。火災に遭うなどの不運もあったが、神田三河町、駿河台淡路坂、神田お玉ヶ池と3度、塾を開設。江戸でも学問と剣術を一人で教える塾は清河塾しかなかったという。

尊王攘夷の同志と「虎尾の会」を結成

清河八郎没後150年に向け

した翌年の1861(文久元)年、奉行所の手先とみられる町人風の男を斬って逃亡生活に入った。幕府に追い詰められながらも、八郎は討幕拳兵を画策。京都から九州を遊説して志士を集めたが、62(文久2)年の寺田屋事件で多くの同志を失い、企ては挫折する。

その後、盟友で幕臣の山岡鉄舟らを通

時代は5年後の明治維新へと激動。浪士組は新徴組、新選組となった。

地方のまちづくりを支援する東京のNPO法人「元氣・まちネット」は、藤沢周平の小説「回天の門」を手掛かりに、八郎が家出して江戸を目指した奥内ルートを「回天の道」と名付けて2009、10年の2回に分けて踏査。本紙が同行取

地域振興役立てる契機

して、政治犯の大赦などを願い出る「急務三策」を幕府に建白。これによって罪を許されるとともに、上洛する將軍の警護を目的に浪士組が結成された。63(文久3)年、京都に入ると八郎は隊士の前で演説し、一転して尊王攘夷の党として浪士組を掌握。攘夷決行を計画したが、直前に江戸で暗殺された。八郎の死後、

材し、詳しく紹介した。その過程で、八郎が庄内町肝煎から山伏峠を経て鶴岡市添川に出る道を通ったことを確認。10年6月には山伏峠に至る山道を庄内町の住民らが復元整備し、「まちネット」が企画したツアーなどが行われている。

アドベンチャーラン大会は、清川の清河八郎記念館から山伏峠を往復する約20

キのコースで開かれる。走る速さを競うだけでなくクイズラリーの要素も取り入れたアウトドアスポーツで、クイズを通して地域のPRにも役立てる。

このほか顕彰事業の一環として、来年3月には八郎を支えた妻の生涯を描いた演劇「お蓮」が同町の響ホールで上演される。清川出身でシナリオライター講師の柘植徳井さんが脚本を執筆し、地元劇団響が演じる。

村山市袖崎地区の住民は、八郎が1855(安政2)年、諸国を旅した帰りに通った場所を示す標柱を、地区の2カ所に立てた。清川の住民が今年5月に袖崎を訪れて語り合い、歴史を通じた地域間交流も生まれた。東京都日野市の「新選組のふるさと歴史館」からは、庄内町で新選組の巡回特別展を開きたいとの打診もあるという。貴重な地域資源として今後も清河八郎の人物像などを掘り下げ、発信してもらいたい。